

民主、社民、国民新の3党が連立内閣を組むことで合意し、9月16日から開かれる特別国会の初日に、3党は足並みをそろえて民主党の鳩山代表を新首相に選出することになりました。

「鳩山連立内閣」には社民党、国民新党からも党首が入閣することに決定しましたが、連立内閣の顔ぶれはまだ決まらず、一方、混迷自民党も総裁選の9月18日の告示まで10日を切ったというのに、いまだに「我こそは」と名乗り出る議員が出ず、政治そのものは、停滞しています。

その中で、鳩山代表は、今後の政権で実施する環境問題に関し「二酸化炭素排出量を、2020年までに1990年比25%削減」と明言し、反響を呼んでいます。欧州諸国からは喝采があるものの、我国産業界からは大きなブーイングが起きています。

鳩山代表のこの発言は、3カ月前、麻生首相が表明した「05年比15%減」から大きく踏み出したもので、日本が温暖化対策に積極的であるという世界に向けた強いメッセージです。

欧州諸国と足並みをそろえ、温室効果ガスの約4割を排出する中国と米国を巻き込み、先進国が結束して高い目標に取り組むことも促すものだと思います。

寺田寅彦のエッセイ「自然現象の予報」の冒頭に、

「自然現象の科学的予報については、学者と世俗との間に意志の疎通を欠くため、往々に種々の物議を醸（かも）す事あり。また個々の場合における予報の可能の程度等に関しては、学者自身の間にも意見は必ずしも一定せざる事多し。左の一篇は、一般に予報の可能なるための条件や、その可能の範囲程度並びにその実用的価値の標準等につきて卑見を述べ、先覚者の示教を仰ぐと同時に、また一面には学者と世俗との間に存する誤解の溝渠（みぞ）を埋むる端緒ともなさんとするものなり。元来この種の問題の論議は勢い抽象的に傾くが故に、外観上往々形而上的空論と混同さるる虞（おそれ）あり。科学者にしてかくのごとき問題に容喙（ようかい）する者は、その本分を忘れて邪路に陥る者として非難さるる事あり。しかれども実際は科学者が科学の領域を踏み外す危険を防止するためには、時にこれらの反省的考察が却（かえ）って必要なるべし。特に予報の問題のごとき場合においては然（しか）りと信ず。余が不敏を顧みずここに二、三の問題を提起して批判を仰ぐ所因（ゆえん）もまたこれに外ならず。ただ徒（いたずら）らに冗漫の辞を羅列して問題の要旨に触るるを得ざるは深く自ら慚（は）ずる所なり。これに依って先覚諸氏の示教に接する機を得ば実に望外の幸いなり。」

という記述があります。

「自然現象の科学的予報については、学者と世俗との間に意志の疎通を欠くため、往々に種々の物議を醸（かも）す事あり。」

という行を、

「温暖化問題の高い目標については、新政権と産業界との間に意志の疎通を欠くため、往々に種々の物議を醸（かも）す事あり。」

と置き換えれば、現状の温暖化問題を言い当てています。

しかし、「90年比25%減」という目標は日本にとってそう簡単に実現できるものではないことは確かです。

産業界からの反発がまず起き、担当官庁からは様々な負担増があるとのデータが提示され、国民の中からも達成を危ぶむ声も出されていますが、これも、自民党ベッタリだった産業界・担当官庁の怠慢が言うことであり、そのつけが国民まで廻ってきたことだと思います。

しかし、かつて、オイルショックや自動車の排ガス規制（マスキー法）を最初に克服したのは、日本の産業界の英知でありイノベーションでした。

「政治の意思としてあらゆる政策を総動員する」と力説した工学博士の宰相が、どのようにこの目標を達成していくのか、国内排出量取引市場や地球温暖化対策税だけでなく、環境対応の新産業の育成などの具体策を見極めながら、我々国民も一緒になって、ひとつずつ着実に実行していくべきだと思います。



< 寺田寅彦 (1878-1935) >

随筆家、地球物理学者。東京市麹町区（現在の千代田区）生まれ。東京帝国大学卒。

航空研究所、理化学研究所、地震研究所、東京帝国大学（教授）などに所属、大正12年（1923）45才の時、関東大震災に遭遇し、火災旋風などの調査に従事する。

「天災は忘れた頃に来る」という言葉を言い出したのは寺田寅彦であるといわれている。

漱石の門下生でもあり、吉村彦彦の筆名で数多くの随筆を書いている。

作品に『漫画と科学』『科学と文学』『西鶴と科学』『珈琲哲学序説』『神話と地球物理学』などがある。



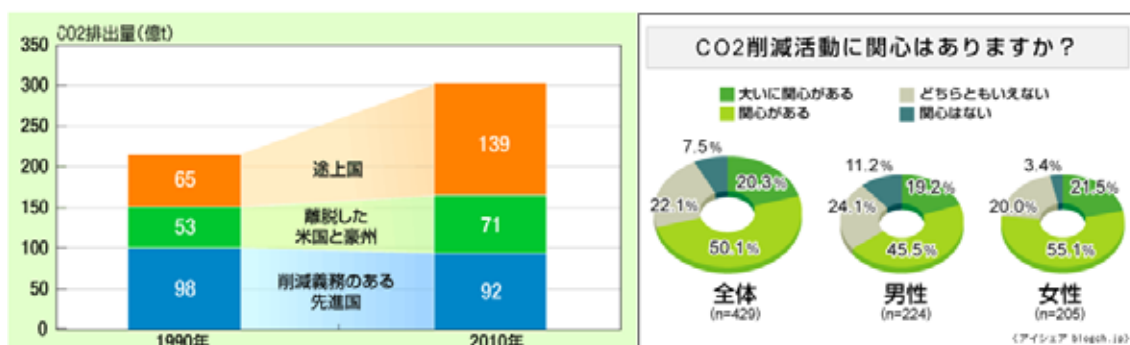
Blogch.jp : 「CO2 削減に関する意識調査」(2008/07/22 11:26 リサーチ)

<http://www.esquare-kamakura.net/eco090913.pdf>

地球温暖化防止のために CO2 削減が唱えられている。ネットユーザーはどのように考えているのか？20代から40代を中心とする男女429名の回答を集計した。

CO2 削減活動に関心はあるか？と聞いたところ、全体では「大いに関心がある」が20.3%、「関心がある」が50.1%で、あわせると70.4%が関心があると回答。「どちらともいえない」は22.1%、「関心はない」は7.5%だった。

男女別に見ると、男性は「大いに関心がある」が19.2%、「関心がある」が45.5%で、あわせると64.7%。女性は「大いに関心がある」は21.5%と同程度だが、「関心がある」が55.1%と男性に比べ10ポイント高く、合わせると4人に3人が関心を持っていた。



春秋：「温暖化ガス削減と経済成長」(9/13)

「安全第一」は最初、「安全専一」とっていた。明治の末に足尾銅山所長に就いた小田川全之（まさゆき）が、この言葉を考えだし標識を作った。鉱毒事件が起こった後に着任し、対策に追われた経験から、従業員の安全にも目を向けたのだろう。

小田川は米国の製鉄会社、USスチールで安全重視の経営に出合った。以前、この会社は生産量の増大を何より優先していたが、危険な作業現場をトップが反省し、「安全最優先」に切り替えたところ、生産効率が上がった。体に負担を強いる工程を減らした結果、ひとつひとつの作業が確実に became ためだった。

足尾銅山は鉱毒事件がその後の公害問題の原点として記憶され、「安全専一」は忘れ去られた。しかし、小田川がまいた種は産業界に広がり、現在では安全な環境づくりが効率や品質の向上につながるという考え方が定着した。近年も女性が楽な姿勢で働けるよう設備を改め、不良品を減らした部品会社の例がある。

安全への工夫は一見、余計な負担で生産性を下げそうだが逆だった。温暖化ガス削減と経済成長の関係も同じだろう。排出減に知恵を絞れば新産業の芽が出る。首相になる民主党の鳩山由紀夫代表が宣言した「25%削減」には、産業界から不満が噴出している。安全と生産性を両立させてきた歴史を思い起こしたい。

< 小田川全之 (1861-1933) >

江戸小石川生まれ。工学博士。工部大学校土木工学科卒業。

群馬県および東京府御用掛として土木事業、その後、古河家足尾銅山で土木工作を管掌、1897 足尾銅山鉱毒予防工事を担当。その後、足尾鉱業所長、足尾鉄道(株)取締役、(株)古河銀行監査役を歴任。



1900 欧米各国を視察し、帰朝後も引き続き足尾銅山に在勤したが、1903 本店理事となり、1906、1907 に欧州に遊んで各国の土木鉱山事業を調査見学し、「安全専一」と名づけた作業心得を作った、「安全必携（安全第一）」の先駆者。

天声人語：「天の摂理」(9/13)

初秋の一日、上州と越後を結ぶ三国街道の山道を歩いた。いわし雲が浮かんで夏はすでに遠いが、秋が色を整えるには少し間がある。群馬と新潟県境の三国峠に着くと、昔ここを越えた人々の名を刻む碑があった。

越後側は豪雪地だけに、ゆかりの名も見える。「雪国」の川端康成は、国境のトンネルを列車で抜けただけでなく、歩いて峠越えもしたようだ。鈴木牧之（ぼくし）は江戸時代に「北越雪譜」を著した越後人である。すべてを閉ざす雪への恨み節のような、その一節は印象深い。

「今年もまた、この雪の中にある事かと雪を悲しむは辺郷の寒国に生まれたる不幸というべし」。初雪を見ての感慨だ。暖地と違って雪が風流の対象ではないことを、くどいほどに説いている。

そんな牧之が聞いた羨（うらや）むような話題が、先日の小紙にあった。モスクワの市長が、雪雲を消して降雪を減らす計画を打ち出したそうだ。除雪費を減らすためといい、人工降雨の技術を応用するらしい。雪雲が来る前に、郊外で降らせてしまうのだという。

雨や雪を人工的に降らせる研究は、日本でも戦後すぐに始まった。「天の意」を人が操る願望は強いとみえ、今では約40カ国が取り組んでいる。将来、より有用な技術になる可能性があるそうだ。

市長の皮算用では除雪費は3分の1に減るらしい。結構なことだが、天の摂理を乱さないかと、素人にはいささかの心配もある。技術のもたらす果実も、収穫の仕方を誤ると痛い目に遭いかねない。北国の福音になればいいが、などと、峠を下りながら考えた。

< 川端康成 (1899-1972) >

小説家。大阪府大阪市北区此花町（現在の天神橋付近）生まれ。東京帝国大学文学部国文学科卒業。

横光利一らと共に『文藝時代』を創刊し、新感覚派の代表として日本の美を表現した作品を数多く発表。

日本ペンクラブ会長、国際ペンクラブ副会長、世界平和アピール七人委員会委員、日本近代文学館監事など歴任。

1968年（昭和43年）に日本人初のノーベル文学賞を受賞。

著書に『伊豆の踊子』『雪国』『千羽鶴』『古都』『たんぼぼ』など。



< 鈴木牧之 (1770-1842) >

江戸時代後期の商人、随筆家。幼名は弥太郎。越後国魚沼郡塩沢生まれ。牧之は俳号。

『北越雪譜』は雪国越後の民俗、習慣、伝統、産業について詳述した牧之の代表作で、天保8年(1837)に山東京山によって開板、当時のベストセ



ラーとなった。

牧之の交友は広く、作家では山東京伝や弟の山東京山、十返舎一九、滝沢馬琴など、その他、画家や書家、俳人、役者など 200 人余りにのぼっている。

著書に『秋山記行』『夜職草(よなべぐさ)』など。

編集手帳：「無料化と25%削減」(9/10)

最新型の体重計は「増加傾向にお気をつけください」等々、音声でアドバイスをくれる。うれしい言葉が聞けるかしらと、わくわくして乗ったご婦人に音声が出ていく、「一人ずつ乗ってください」。

早坂隆さん「続・世界の日本人ジョーク集」(中公ラクレ)の一節だが、太めの身にはつらい“食欲の秋”である。好きな物を腹いっぱい食べ、しかも見違えるようにやせる方法を、あの人ならばご存じかも知れない。

民主党は新政権のもとで高速道路を無料化すると約束している。その便利さ、快適さを存分に召し上がれ、と。

車が殺到して渋滞になれば、満腹のツケは二酸化炭素排出量の増加という形で回ってくるはずだが、鳩山由紀夫代表は一方で、温室効果ガスを「2020年までに1990年比25%削減する」目標を言明してもいる。まもなく首相になる人に、減量の秘策を教わりたいものである。

「無料化」と「25%削減」をよその国の人が見れば別々の政党の、別々の党首が話した言葉と思うだろう。体重計ならぬ公約分析計があれば、「一人ずつ話してください」と音声が出てもおかしくない。

<早坂隆(1973-)>

ルポライター、エッセイスト。愛知県岡崎市出身。帝京大学文学部心理学科卒。

旅行雑誌の編集の職を経てフリーのライターとなり、紛争国・地域にも度々取材に赴き、現地の生々しい生活を紹介。

2001年から2年間ルーマニアに移住。「ルーマニア・マンホール生活者たちの記録」で話題を集める。

著書に『世界の日本人ジョーク集』『祖父の戦争兵隊万葉集』『戦時演芸慰問団』など。



余録：「バランス感覚」(9/7)

アフリカのタンガニーカ湖にスケールイーターという風変わりな魚がいる。スケールとは英語で「うろこ」の意味だ。自分より大きな魚の背後に忍び寄り、体当たりざまに何枚かのうろこをはぎ取って食べることが名前の由来だ。

この魚の面白いところは、「右利き」「左利き」があることだ。もっぱら獲物の右側から突撃するものが、右利き。こいつは口が左方向にねじれている。その方が、うろこを効率的にはぎ取れるからだ。左利きはその逆だ。

どちら利きになるかは遺伝で決まり、割合はほぼ1対1だという。しかし、右利きが優勢な時期と左利きが優勢な時期とが数年周期で入れ替わることが最近分かってきた。右利きのスケールイーターがはびこれば、他の魚たちは右側を重点的に警戒するようになり、今度は左利きが有利になる - - などの説があるようだ。

京都大学編「生き物たちのつづれ織り」という冊子で堀道雄教授（動物生態学）が、その不思議な生態を紹介している。自然界の精妙なバランス感覚がうかがえて興味深く、生き残りに懸命な魚たちの姿にもうたれる。

さて、民主党の圧勝で終わった総選挙である。首相指名選挙を控えてゴタゴタが続くなど、敗れた自民党の激震が収まらない。一方で「いずれ揺り戻しがくる」と再起を期する落選組も多かろう。その不安と焦燥は理解できるが、自然の揺り戻しに頼るだけでは芸がない。

ここはアフリカの魚たちではないが、少数派の利点を最大限生かしてほしい。過去のしがらみを断ち切り、自らを鍛えるチャンスでもある。むしろ大きすぎる勝利のうちにこそ、敗北の芽が潜むことを、自然は教えている。

< 堀道雄 >

京都大学大学院理学研究科教授。

昆虫のハンミョウの生活史・個体群動態・生物地理学についての研究、琵琶湖およびアフリカ・タンガニイカ湖の魚類群集における種間関係と多様性の維持機構、また左右性の機能に注目した種内多型の維持機構についての研究。



著書に『海浜性ハンミョウ類のすみわけと共存』『タンガニイカ湖の魚たち(共著)』など。